

選考委員会総評

委員長 細江英公(ほそえ えいこう)

一年で一番大事な林忠彦賞の審査が終わったばかりです。写真の審査は一言では言えませんが、あるものは楽しく、あるものは苦しい。林忠彦賞の選考は写真を見ていると重圧を感じます。そのくらい皆さんの魂をつぎ込んだ作品がたくさんありました。

林忠彦賞ができて28年になります。林忠彦先生は日本を代表する写真家で、その存在は日本の写真界の中で重要なものです。林先生が戦後の写真界で果たした役割は大きいと思います。特に印刷物や雑誌等に関わりを持った写真家の中でも重要なポジションにいらっしやいました。もちろん写真雑誌で果たされた役割は大きかったのですが、写真に縁の無い方々が読者である「小説新潮」や「婦人公論」「文藝春秋」など、一般向けの雑誌の中で先生の果たされた役割は大きかったと思います。林先生は日本における写真ジャーナリズムの先駆者です。戦後の雑誌ジャーナリズムにおける写真の重要な役割を、林先生は担っておられました。

その林先生の名を冠した林忠彦賞に選ばれた野村恵子さんの「Otari-Pristine

Peaks 山霊の庭」はインパクトのある良い作品でした。野村さんは信州小谷村の山奥に行き写真を撮られました。山に暮らす人びとや狩猟で撃ち殺された動物たちの姿は印象的です。そこには現代ではあまり目にすることのなくなった直接的な命のやりとりがあります。いつか失われてしまうかもしれないこうした人びとの生活を、我々はこの写真集によって得がたい記録として持つことができるのだと思います。

周南市が林忠彦賞を創設され、いろいろとご苦勞もあつたのでしょうけれど、これを毎年行われ今日まで続けてこられたことは周南市民の大きな誇りであると思います。